



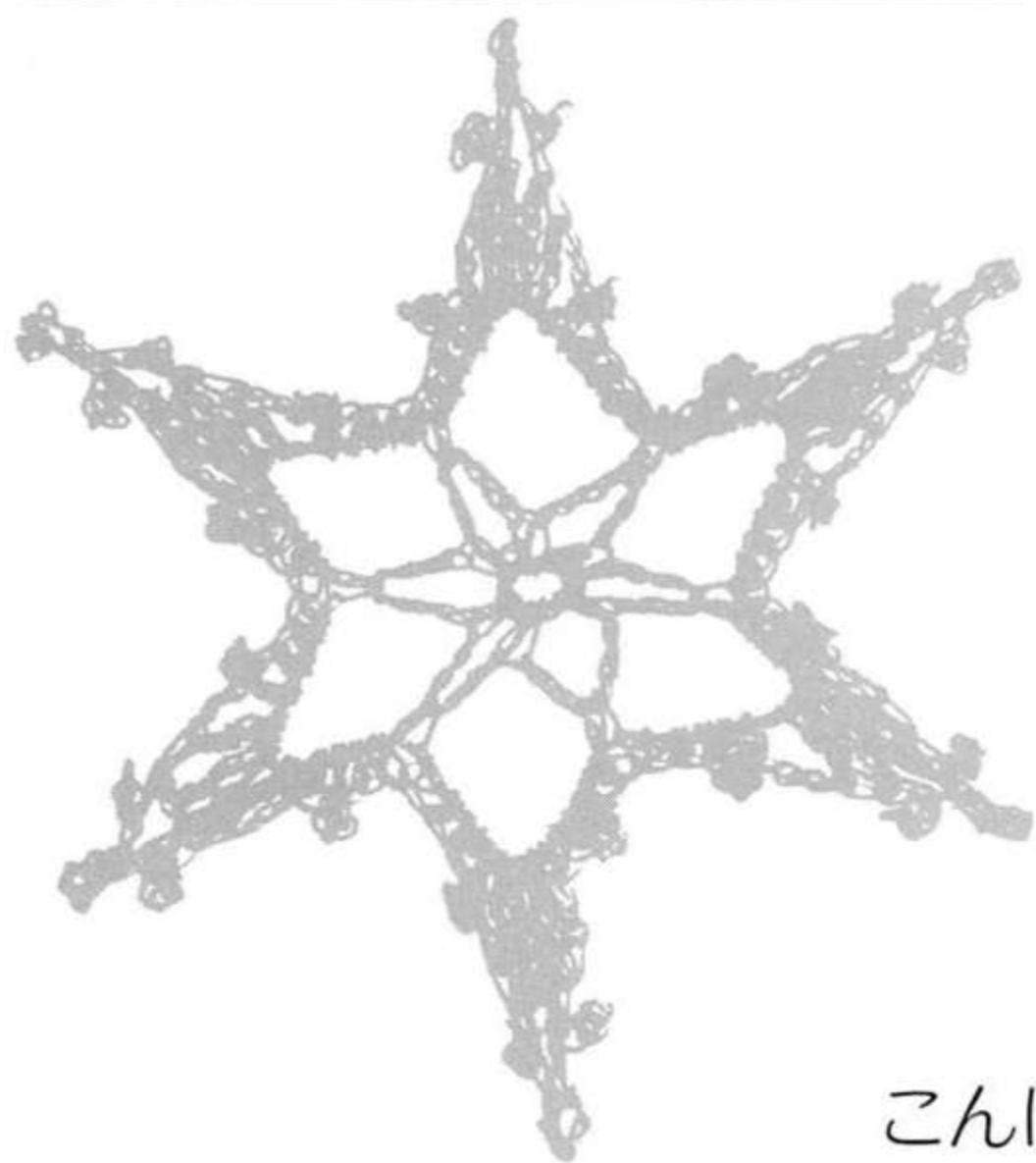
LALA LOVE LOVE SHOW

ラララブライブ

♥
ADULT
ONLY!



LALA
LOVELOVESHOW
ラララブラブショウ



こんにちは! またははじめまして!
あきらです ^^

今回はまたもや ToLOVE る本で
す。リト×ララでクリスマスなお話
です。ラブラブっていいよね! って
かんじで描いてみました~。

少しでも楽しんでいただけたら嬉
しいです! ではまた後記で ^^

PREFACE



メリークリスマス！
リト♡

ぷしげんとを
もって来たよ〜

嬉しいけど

何なんだ
その格好…

だって恋人们的の
クリスマスって
そういうイベント
なんでしょ。

だよねー？
ぷしげんと

え？



あー!
そっか

わがった♡

なに
何が?

ちよつと待っててね
リト

ん...



ええっ!?
ちよ、らら...!

えへへ♡

らら

らら
ん



アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

だめー！
♡

アハハ

アハハ



今日はすごいへ
頑張るから
期待しててねー！

うわっ……！

じゃあ



んっっ♡

んっ

んっ♡

んっ

んっ♡



ちゅちゅ
ぎゅぎゅ……んっ

んっ♡

んっ♡



はぁ...

ん...?

おほい

ん♡

ん...長持ちいいん...
リト...

はぁ

うん...!!

すげえ
気持ちいい...

お!

ん...♡

ふあ...
リトのおいし...
固くなる...♡

はぁ

は

ん

おほい

おほい

ん

ん

ん

ん

ん

ね…私も
もう……

アソロガごとごと
切ないのぉ…♡

あーっ！

が…
我慢できない……っ

ちゅっ…

ちゅっ…

くっ

ち…ちゅっ
ニッガッ…

ちゅっ…

お願い…っ！

びくっ

びく



すご...
めちゅめちゅだよ
ごご...

ぴ

とっ

ん...

か

あ

り...り...り...

あ...

あ...!

ん...ん...ん...

あ

あ

ら...ら...ら...

あ

あ

すーっ…
すーっ…
すーっ…
あつ…

んっ

んっ

んっ

…
キムンキムン…
キムンキムン…
キムンキムン…

んっ
うれし…

んっ
うれし…

すーっ…
すーっ…
すーっ…
あつ…

んっ

熱くて…

アソコが濡けちゃう

よあ…

最高だあつ…

うら…



あつ...♡♡
わ...わたし...!
イシイ...

あ

ほ

だ...大好き!

ほ

あ...♡♡♡
好きだよおま...

END

あ
御門先生

クリスマスのおアドバイス

ありがとう!♡

あ♡♡

あ♡



LALA
LOVELOVESHOW
ラララブラブショウ

恋人がサンタクロース

「今日のクリスマスパーティー、楽しかったねー！」

たしかに楽しかった。知ってる顔みんな来てて、大騒ぎをした。西連寺のふわっとした白い私服はすごくかわいかったし、天条院さんの用意してくれた料理はすっごいゴージャスだった。初岡と沢田は派手なサンタのコスプレをして、あいかわらずララや西連寺の胸をもんでいた。猿山はそれを見ながら、でれっとしたしまりのない顔をしていた。ザステインはあいかわらず身体を張ったコントをやったし、美柑も楽しんでたみたいだった。

今回もいろいろあったけど、トータルではいいパーティーだったと思う。けどさ。

「なんで、オレたちこんなとこに居るんだよ!？」

赤で統一されたやけに洒落た室内。松ぼっくりや赤い実のついたクリスマスリースや、金色の釣り鐘のオーナメント。前面ガラス張りの清潔感のあるバスルーム。多種多様なゲーム機。でっかい液晶テレビ。テーブルの上にはウエルカムドリンク。部屋に流れる静かでムーディーなクリスマスソング。

ここまでなら、シティホテルといっても平気なんじゃないかと思う。オレはそういうとこ泊まったことないけど、旅行のチラシの写真に載っててもそれほどおかしくない。

「だけど、これはないだろ。」

拘束具つきのまっ赤な革張りのチェア。

壁に、X字のハリツケ台。

カラフルな大人のオモチャがいっぱい入ってる自販機。

目の前に、ミニスカサンタの格好をしたララ。

オレたちは、ラブホテルに居た。

★

ララことララ・サタリン・デビルークは、銀河系を束ねるデビルーク星の第一王女で、ピンクの長い髪をした美少女で、なぜかオレこと結城梨斗の同居人だ。

オレはごく普通のどこにでもいる高校生だ。仕事で不在がちの両親と、ちよつとこまっしやくくれた小学生の妹がひとりいる。運動神経はわりとい方だけど、勉強はまあそれなり。

そんなごく普通の男子高校生のとこに、突然現れたのがララだった。

宇宙人にも、お姫様なんてものにも縁がないのがあたりまえだったのに、今ではすっかり馴染んでしまった。

もつともララもオレの知ってる「お姫様」とはけっこう違ってたけど。お姫様っていったら、何を連想するだろうか。身近にお姫様がいる暮らしをしている日本人男子高校生はほとんどいないと思う。絵本とか漫画とかゲームとか映画とか、もうちよつと現実的になれば新聞に載ってる王族のニュースとか。知ってるのなんて、それぐらいだろう。

ララはそんなオレの知ってる「お姫様」ってやつイメージとはぜんぜんちがった。ものすごい美人（なにせ、ララのお母さんは宇宙一の美貌って評判らしい）ってとこ以外は、どちらかといえば鳥も通わぬ無人島から出てきた女の子みみたいだった。

なにせ一般常識がない。

ララが非常識というのではない。オレたちみたいな庶民の常識が通用しないのだ。

下々の暮らしというのにまったく縁がなかったらしく、スーパーに行っても面白いね！ 鯛焼きをたべても面白いね！ 学校に通っても面白い

ね！なんでも楽しいらしい。

『長くつ下のピツピ』みたいだよねえと美柑が言ったことがある。ちょうど、そのとき美柑は、応接間のソファで学校の図書室から借りてきた本を読んでいたのだ。

たしかにちよつと似てるかもしれない。パワフルで奇想天外で他人の馬鹿げた都合なんて気にしないで、自分にいつも正直なところ。そしたらオレたちはトミーとアンニカか。

オレ自身はごくごく普通の小市民なので、ララのそういうところが、羨ましかったり、好きだったりする。

うん、まあ、好きなんだけど。

★

「だからって、ラブホはないだろ、ラブホは——！」

オレは青筋をたてて怒った。

プレゼントがあるから、ちよつとだけ目つぶっててね！って言われて、連れ込まれた先がここだった。何考えてるんだ、ララのやつ。高校生のカッブルが来るとこなのかよ。いや来るやつらもいるかもしれないけど、いるだろうけど。でもオレは、その、こういうの苦手なんだよ。

「わーん、だって地球人の恋人同士は、ラブホテルで、クリスマスに愛を確かめ合うって——！」

「誰に聞いた！」

「御門先生」

あの先生ときたら！

「この部屋も、この服も、このあいだのお礼にって」

うちの高校の美人でやけに色っぽい宇宙人の養護教諭は、地球に来る前にいろいろあったらしくって、先日もなんかワケのわからない（たぶんマ

フィアとかヤクザみたいな）組織に狙われたりしていた。お礼というのは、そのときのことなんだろう。オレが何かしたというわけではなく、ララと金色の闇が助けてたわけだが。

宇宙人だけども、本質的にはいい人なんだと思う、御門先生って。

生徒の間でも評判いいし。ララたちも仲いいし。

でもちよつとした悪巧みが好きなのは困る。特に、地球の生活に慣れてないララのことをいじって遊ぶのは困る。そのとぼっちは全部オレにくるんだから。

オレがはーつとふかく溜息をついて、ソファにどっかどっかと座り込んだ。ララは拘束具のついた椅子に座って、うるうる涙をためてこっちを見てた。どういふ用途の椅子なのかわかっているのだろうか。

「なんだよ」

そういう顔されると、こっちが悪い気になるじゃん。

「だって、すごくいいなって思ったんだよ」

「なにが」

「ラブホテル」

「なんで」

えっちなホテルじゃん。

「愛のホテルって素敵じゃない？　クリスマスに恋人同士が泊まるホテルなんて、地球人ってロマンチックだよね！」

目をきらきらさせて、両手を組んで、大まじめに言ってくるから、どうしていいかわからなくなる。ピュアなのだ。ララは。そういうところ、好きだけど。ララのことは好きだけど。でもオレたち高校生だし、なるべくなら健全なおつき合いをするべきだと思うし、えっちなことしたことあるけど、あんまりそればっか考えてるのもよくないし。

だってオレだって現役高校生男子なのだ。

ララみたいな美人でかわいくて綺麗な子がいて、ムラムラこないわけな

いだろ。

率直に言えば、やりたい。リップとか塗って無さそうなのに、つやつやしてピンクのくちびるにキスしてみたい。舌をつつこんで吸い合ったときの気持ちよさを味わいたい。白くてふつかふかのおっぱいとか揉んでみたい。ちっちゃな乳首をこりつとするまで噛んでみたい。つるんとして、滑らかな尻をなで回したい。その間にある赤い花卉をまさぐって、ぐちよぐちよに濡れたところに突っ込んでみたい。

でも人間は理性があるし。

いろいろあるし。

そればっか考えてんのマズイし。

ああ、もう、これが家なら頭を冷やすために、庭に出て花の世話でもするのにな。

そう逡巡して、うろうろと歩き回ってみる。部屋は思ってたより広い。SMプレイとかするためのなのか、床はつるんとした黒い石みたいなのだった。

この小綺麗な、女の子が好きそうなかっこいいインテリアの部屋は、どこかしら淫靡な匂いがする。バテン型のハリツケ台とか、(ララが今座ってる)両足を開かせて固定して座らせるえっちな椅子とか、かっこよく壁にディスプレイされてる革の鞭とか、鉈をいっぱい打ってある目隠し用のマスクとか、そういうSMテイストの品がそこらかしこにあるからだろう。見てるだけで顔がかーっと熱くなってくる。ああ、まだノーマルなセックスだって、そんなにしたことないのに。

「ごめんね」

赤い椅子に座ってたララがそう言った。

オレは振り向いた。

ララはくちびるをきゅつと噛んで、うつむいていた。前髪が降りてて、表情はよく見えない。

「リトと二人っきりになったら、うまくいくかなあ……って」

「おい、ララ……」

「でも、わたしだけ楽しくてもだめだよ……」

目元を、こしこしと擦る。

なんでなんだよ。どうしてそんな泣いたりするんだよ。オレだって別に前を泣かせたいわけじゃないのに。セックスって気持ちいいけど、お前がOKしてくれるからって、そんなことばかりしてちゃ、男として恥ずかしいし情けないと思ってるから、だから、我慢してんのに。

「わたし、リトのこと好きだよ。好きだから、ぎゅーつとしてほしいし、もつとくつつきたいよ。それって、ダメかなあ？」

ああ、もうそんなこと言うなつての。

我慢できるわけないだろ。

「リト？」

オレは椅子に座っているララの前にひざまずくと、頬に両手をあててキスをした。

★

ララのくちびるの感覚は、ぶっくりしている。やわらかくて、気持ちがいい。舌でなぞると、ひくんと震えた。口のなかに舌を滑り込ませる。ぬるつとして熱い。唾液が甘かった。無心に吸っていると、ララの舌先もそれに応じてくる。キスすんのって気持ちいいよな。口を使ってるだけなら、メシをくつてる時も同じなのに、なんでこんなに気持ちがいいんだろう。

「リト……」

ララが甘い声を漏らす。

キスを深くしながら、そのままララを押しおす。サンタの赤い三角帽子が床に落ちた。拘束具のついた椅子の背もたれは、海岸に置いてあるデ

ツキチエアみたいに寝そべるようになっていた。仰向けになったララの胸に手を這わせる。ララの着ているミニスカサントの服は、ちよつと豪勢なかんじのするフェイクファーで、ふかふかして、上から撫でるだけでも気持ち良かった。胸のあたりをさわさわと撫でていると、ララの乳首がきゅんと尖ってくるのがわかった。っていうか。

「下着、付けてないの？」

胸のふくらみの中に、ブラジャーらしい感触がない。でも、なにか胸の回りに別のものがあるみたいなんだけど。

「あ、あのねっ、恋人にだけみせる下着っていうのを御門先生からもらったの」

ララは顔を真っ赤にした。いつもは、オレの前で平気ですっぽんぽんになるくせに、ヘンなの。

ララは、侍女や護衛やらがいる生活が普通だったせいか人前で裸になることにまったく羞恥心がない。オレにはあるんだけどさ。

それより、その恋人用の下着って何？ 大人っぽい黒とか、派手なすけすけの下着ってことなんだろうか。

上着の裾から手をいれて、ララの身体に直接触れる。なめらかで、きゅつとひきしまったウエストを撫で上げた。

……なにか、妙な感触がする。

つるつるして、固い、細いヒモみたいなものが、ララの身体に巻き付いてるみたいだった。オレはララの顔を見た。ララは困ったようにかたちのいい眉をひそめて、頬を赤くそめたまま、恥じらうように顔をそむけて見せた。

らしくない。

いったいなんだっていうんだ、これは。

オレはボタンをはずして、ララの前を開けた。

「……………」

目が点になった。

たしかにララはブラジャーをつけてはいた。これがブラジャーと呼べるのならば。

乳房のまわりをぐるりと赤い革のベルトが取り囲んでいる。それだけじゃなくて腹の部分も、スカートに隠れて見えない部分まで、縦横無尽にベルトが巻き付いている。ひどく淫猥な格好だ。これって、いわゆるSMのボンテージとか言うんだっけ？

「こ、こういうのが地球人の男の子は、好き、なんでしょ？」

もじもじしながらララが言う。ハダカはOKでも、この格好は羞恥心を煽るらしい。男に欲情してくださいって示してるわけだもんな。この服も御門先生がくれたのか。あのひとは、もう。

でも、そんな殊勝なララの姿をみていると、ちよつぱり虐めたくなくなる。

「ララだって、いやらしい格好して、男誘うの好きなんだろう？」

「ち、ちがうもん！」

ララがふるふると首をふる。重みのある乳房がそのたびにたふたふ揺れた。きれいなピンク色の小さい乳首が、ショートケーキの上のイチゴみたいにツンと尖っている。

すごい、うまそう。

オレは思わず、それにかぶりついた。

「ひゃんっ！」

ララが抗議の声をあげる。オレの耳には届かなかった。頭に血が上ってそれどころじゃない。そんな情景に、こんなセリフを言われて、どうにかならない男なんていない。ちゅうつと音を立てて吸うと、ララの胸の先端がさらに固くなってきた。

「ララの乳首、すごい勃起してる。気持ちいいと女の子も勃つんだな」

「うう……、あ、あんまりヘンなこと言わないで……」

「なんで？」

「は、恥ずかしいよ……」

「でも、きつとこっちの口でも証明してるぜ？」

うわー、なんだこのクソ恥ずかしいセリフ。この部屋のせいだ。ムードのせいだ。心臓をどくどく言わせながら、手をミニスカートの下にもぐりこませる。ララの張りのある太ももをすーっと撫で上げていく。

「や、やだ……。こんな恥ずかしいところ見られるのやだよ……。……」

ララはぱたんと両足を閉じた。開かせようと手をかけても、ぎゅつと膝頭に力をいれたままだった。実のところ、デビルーク星人のララはオレよりも断然力が強いのだ。抵抗されたらかなうわけがない。オレはララの顔を見た。

「見せてくんないのかよ」

「や、やだもん！」

ララの顔は、ゆでだこみたいに真っ赤だった。かわいいけど、ここまできて生殺しはないだろ。

「じゃあ、こうしたらどうかかな？」

すっとお尻に手をまわしてララのしっぽに触れる。デビルーク星人のララはお尻に黒いしっぽを生やしてるんだけど、これがすごく感じるらしい。

「ひゃんっ！　だ、だめっ！」

指先でそっと触っただけで、ララが身をよじる。まるで自分で自慰するみたいにララのしっぽを擦ってやる。ララはそのたびに小さく喘いだ。抵抗がなくなったところを見計らってスカートを引き抜いた。ララのやつはすごい下着を付けていた。

上半身を包んで居るのと同じ真っ赤な革が、股間にくい込んでいて、それがララの愛液でぐしょぐしょに濡れて光っていた。割れ目の部分とその後ろの窄みの部分は、ぱっくりと口をあけたように裂けていて、挿入に問題がないようになってる。機能性なんてまったくなくない、淫らな、欲情を誘うだけの衣装だった。おまけに Eat Me なんて刺繍がしてある。御門先

生はどっからこんなものを手に入れたんだ。

オレはララの花弁からたっぷりと蜜を救い、濡れた指先をララの目の前に突き出した。

「ほら、こんなになってる」

見せつけるようにオレは自分の指をしゃぶった。ララの味がした。

「リトって、こういうとき意地悪だよ……。……」

ララは泣きそうな顔をしていた。涙で潤んだ瞳がきらきらして、とても綺麗だ。ララは笑ってるのが似合うと思うのに、もつと泣かせたいって気持ちになってしまふ。

目蓋にくちびるを付けて、透明な液体を吸った。しよっぱいのに、なんだかジンと舌先がしびれて妙に甘いような気持ちになった。女の子の涙つてきれいだと思う。かわいい。

それからもう一度ララと長いキスをした。舌をからめたあと、貝殻のような耳を甘噛みする。鼻に掛かった甘い声がかきこえる。くったりと力が抜けるとところを見計らって、ララの両足をかかえ上げると、椅子の器具に固定した。

「え？　あ……？」

まだ状況のわからないララの両手も固定する。ララはオレの前で、分娩台に載った妊婦のように身体全体をさらけ出していた。白いからだは、欲情して薄桃色に輝いている。股間に巻かれた革のベルトを軽くゆすってやっただけで、勃起したクリトリスが刺激され、ララは淫らな声をあげた。

「や、やあんっ！　い、弄らないでえ！」

「今日、こんな下着をつけて、ずっとこうやって感じてたんだ」

「だ、だって、御門先生が、みんな恋人ならそうしてるって言うから、だからあつ！」

「それでみんなの目の前で欲情して、ここをぐしょぬれにしてたの？　オレのアレ、突っ込んでもらうことばかり考えてた？」

「ち、ちがうもん……。そ、そんなこと……。わたし、わたし……」

「正直じゃないよな、ララは」

オレは財布をとりだして、部屋の隅にあった自販機からローターを購入した。手のひらにすっぽり入ってしまうようなちいさなローターだった。説明書が付いていたので読んでみる。椅子にしばらくつけられたララはじつとオレの行動を見ていた。

「えっと、クリバイブ——ふたつの舌で、包皮をしっかりとキャッチ。クリトリスを直接刺激することができます——だって」

「な、なにそれえ……?」

ララはこれの用途が想像つかないようだ。こういうのって地球以外にはないんだろうか。それともララが知らないだけなんだろうか。御門先生に聞いても、適当にかわされそうだし、ザステインに聞いてもわからないだろうな。

「ララを気持ちよくするために使うんだよ」

オレはローターに電池を入れて、スイッチを入れてみた。ぶうんと微かにモーター音が響く。かがみ込んで、そっとララの股間に当てる。

「んんっ!」

花芯の包皮を指先でひらいて、ローターの二枚羽で挟み込む。機械の微細な振動が、ララの赤く勃起した淫核を直接刺激した。

「ひゃあんっ!」

「気持ちいいのか、ララ?」

「な、な、なにこれっ……! す、すごい、すごいよお……!」

赤いふわふわのブーツだけを履いたララの背中が反り返る。

オレは、赤い革の下着のすきまにローターの本体を押し込んで、抜けないうようにした。それからララのふっくらと脹れている肉ピラをかき分ける。結合するための穴のあいた革の下着で強調されたそこは、まるで性交のための道具みたいな感じがして、普段の全裸のララよりもずっと、いやらし

く見えた。

「ララのここ、どろどろだぜ」

「あっ! あっ! だ、だめえっ!」

「舐めてほしい? 指がいい? オモチャがいい?」

乳首を舐めながら、指先を二本そろえて、そのままぐちゅりとララの秘壺に突っ込んだ。すっかり濡れそぼったララの秘具はなんの抵抗もなく飲み込んでいく。中指と人差し指で、ララの肉壁をえぐってやると、ヒダヒダがきゅうきゅうと締め付けてくる。

ララの膣内はあったかくて気持ちよかった。指って、神経のあつまってる場所だから、熱い秘口に入れただけでも気持ちよく感じる。ローターの振動がかるく伝わってくる。指だけで気持ちいいんだから、オレのペニスを入れたらもっとすごいんだろうなって想像してしまう。

「リト……リトお……!」

悩ましげにララが腰をくねらせる。両手と両足を固定されているせいで、あまり自由に動けない。寝そべっても形のいいおっぱいに顔をうずめて、乳首をきゅつと吸い上げた。かりつと軽く嘔んでやる。

「ひゃうんっ!」

指をいれているところがビクビク収縮を繰り返している。顔をあげてそこを見ると、とろとろと白濁した愛液がったい落ちていた。

「ひくひく動いてる」オレは花卉をつつと指先でなぞった。

「ひあっ!」

ララの身体が細かく震えた。

「舐めてほしい? 入れてほしい?」

「リト……い、意地悪だよお……!」

これは意地悪っていうんじゃないと思う。

「ねだってくれよ」

ぐちゅと膣を覗る。

「あ……、リ、リトお……」

ローターがぶるぶると震えて、ララのクリトリスを刺激し続ける。ララは首を左右にふって、快感を堪えるのに必死だ。

「し、して……」

「何を？」

「リトの、リトのを、わたしの……なかに……」

「どこに？」

耳もとでささやく。オレだって突っ込みたくてたまないんだけど、意地悪してしまうのはなぜなんだろう。そうするとララのふだん見られない表情が見られるからかな。それともオレがスケベってことなんだろうか。いれている指を、もう一本ふやす。ララは軽く悲鳴をあげた。浅く入り口の付近だけをなぶっていると「もうやだ、やだ」というララの声が聞こえた。

「抜いて欲しい？」

「ちが……っ！」ララはぶんぶんと首をふった。きれいなピンク色の髪が揺れた。汗を掻いた額にいくつか張り付いている。

「お、奥ッ！ 奥に、入れてッ！」

「ローター？」

「ちがうの！ リトがいい！ リトをわたしの中に入れて！」

オレは指先を抜いて、立ち上がった。ジッパを下ろして、いきり立った自分のペニスを取り出す。硬度をもった肉棒を、ララの膣口に先端をあてた。ずつ……つと体重をかけると、濡れそぼったララのそこはなんの抵抗もなくオレの欲望を飲み込んでいった。

「ああんっ………！」

ララが甘い悲鳴をあげる。

「はあ……っ！ は、はいつてくる………！ リト……リトが………！」

「んんっ！」

突っ込んだ途端、オレにララを虐める余裕なんてなくなってしまった。気持ちいい。熱くてぬるぬるのララの膣がすっごい気持ちよくて、頭がバカになりそうだ。オレは一心不乱に腰をふった。ララの太ももにオレの身体がぶちあたって、パンパンツと音をたてている。接合部の液体がじゅくじゅくと泡をたてている。

「いいっ！ き、気持ちいい！ ララの膣ッ！」

「わ、わたしも！ わたしも、リトのきもちいいよお………！」

テクニクなんて無いし、余裕もないから、ララのいいところを擦り上げるとか、そんな芸当はできなかった。ただもう奥まで、根元まで、ずっぷりと突っ込んで、引き抜く。オレの肉棒のえらのはった部分が、ララの膣のヒダヒダとしたところをぐっとかき回して、そのたびにララが悲鳴をあげる。ペニスから脊髄をとって頭に真っ白い快感の奔流が押し寄せてくる。なんでこんな身体の一部がつながってるだけで、気持ちいいんだろう。

ペニスだけでは物足りなくなって、ララの身体に倒れ込むようにしてのしかかる。柔らかな乳房にふれる。汗をかけた滑らかな皮膚にふれる。それから、ララのくちびるにむしゃぶりつく。

オレもララも、ケモノみたいに、ふっふつとただ荒い息を吐きながら、くちびるを重ねた。すぐに舌がからみあい、びちゃびちゃと濡れた音をひびかせた。上も、下も、両方とも繋がっていると思った。もつと繋がりがたくて、頭の上に高く拘束されていたララの手を握った。指先をからめたかったのに、やっぱりやりづらくて、ベルトを外そうとしたけど、見ないで外すなんて器用な真似はできなかった。かわりに、オレはララの背中に手を回した。

「リト……リトお………」

まるでララはそれしか知らないみたいに、ひたすらオレの名前を呼んでいる。その声が愛おしくて切なくて、どうにかなりそうだと思った。ララ。

すげえ気持ちいい。すげえかわいい。すげえ好き。気持ちと快楽がたかま
つてきて、暴発寸前だった。

「ララッ……！ オレ……出るっ！」

「んっ！ うんっ！ リトの……リトお……！」

ララの膣がきゅつと締め付けると同時にオレは精液を放出していた。び
ゆくびゆくと、先端から熱い液体が噴き出していく。その快楽に目の前が
真っ白になる。ララの身体がしなやかに反って、微かに自由になるふとも
もの筋肉がさざ波のように震えた。噴出した精液がララの胎内を満たして
いく。オレを包み込んでいるいやらしい花卉も膣もその奥まで。オレはラ
ラの上に倒れ込んだ。

全力疾走したあとのランナーみたいに、オレとララは荒い息をついてい
た。

「あ、ごめん。重いよな」

オレは椅子に両手をつけて、ララの上から身体を起こした。ずっ……と
ペニスをぬくと、ララから小さな悲鳴が聞こえた。ローターはいつの間
か外れて、床の上でぶるぶると震えていた。その回りにサンタの服がちら
ばっている。ローターと服を拾い上げてソファに置いた。スイッチもちや
んと止める。それからララを拘束していた枷をはずした。

「ごめんな、キツかったろ？」

どうもSMっぽいのは、オレに向いて無さそうだ。えっちな服は興奮す
るけど、オレがリードを保っているいろいろえっちなことをし続けるなんてで
きそうにない。入れただけで、バカみたいに気持ちよくなっちゃうもんな。
ララは身体を起こして、すこし赤く跡のついた手首をさすっている。

「痛かった？」

「ううん」ララは首を横にふった。「動けないとちよつと不自由だけど、
でもリトがぎゅつとしてくれて、嬉しかった」

頬を赤らめて、恥ずかしそうに言われると、こっちの方が照れてしまう。

好きだけど。ララのこと好きだけど。口に出して言うのは恥ずかしいんだ
よな。文化の違いなのかな。それともオレ個人の問題なんだろうか。お互
いもじもじしていると、ララが遠慮がちに尋ねた。

「あの、お風呂はいつまでいいかな？」

うんと肯くと、ララはブーツをぼんぼんと脱ぎ、とととと裸足で走って
バスタブに向かった。太ももの内側が、精液でとろりと汚れて、ああ、
したんだなって感じがした。イヤらしいのと、あとアレってオレのなんだ
なって、そんな気持ち。

風呂のブースは透明なガラスで区切られていた。天井から床、扉まで全
部ガラスだった。床や壁には白い大理石っぽいタイルが貼ってあり、猫足
のバスタブが置いてあった。バスタブも透明だった。ちよつと面白い。洗
い場はけっこう広くて、赤いバスマットが置いてあった。空気を入れるタ
イプのやつ。じつとそのままだとどつてると、お風呂の前でララがこっ
ちを向いて、ぼたぼたと手を交差するように振っていた。

「なんだよ」

声をかけてみる。

「見ちゃだめだつてば！」

「なんで」

いつも平気じゃんか。それどころか、一緒に風呂に入ろうとか誘うくせ
に。

「へ、へんなどこ見られたくないもん！」

へんなどころ？

ララは股間を隠すように手をかさねて、こっちみちやだめー！と騒いで
いる。オレは立ち上がって、そちらに向かった。ララは、透明なバスタブ
の中で、お湯も出さずにぼたぼたしている。

「お湯ださないと、洗えないぞ」

「だから洗うところ、みちやダメだもん！」

赤いリンゴみたいな顔でそこまで言われてようやく気が付いた。それはそうだ。女の子が股間を洗っているとこころなんて、他人に見られたいワケがない。いくらお姫様暮らしで他人に身体を洗ってもらうのも当然なララでも、そんな格好見られたくないよな。

でもそう言われると、悪戯心がむくむくと沸いてくる。

「オレが、洗ってやろうか？」

「え？」

服を脱いで、風呂場に入っていく。壁に掛かっていたシャワーを取り、お湯を確かめる。ちょうどいい温度にして、ララにかけた。

「ひゃあ！」

たちまち白い蒸気がもわつと立ちこめる。オレはバスタブに入って、ララの前に座り込んだ。濡れた顔をこしこし擦っていたララの足首を、ぐいっともちあげた。

「わっ！　だ、だめだよー！」

「さつき見たじゃん」

「で、でも、それとちがうもん！」

「きれいにしてあげるからさ」

バスタブのふちのところにかけてさせたあと、ボディソープを手にとつて泡立てた。恥ずかしいのか、ララはくちびるを噛んで、顔をそむけている。クリームみたいな白い泡をそつと形のいい乳房に乗せてみる。

「んんっ……！」

ちよつと面白かったりして。乳首のまわりにたつぷり泡をぬりたくる。へソや、真っ白い太もも。それからまだ赤く充血して、精液と愛液で淫らに濡れそぼっている花卉に泡をのせる。

「はあ……っ！」

指先で軽く触れただけで、ララはせつなげな声をあげる。まわりにたつぷり塗りたくって、それから大陰唇を丁寧に洗った。大きく広げて、中の

びらびらしたところにも触れる。泡で見えないけど、クリトリスを軽く撫でてあげたら、固くしこっていた。ララはちいさくうめいた。

「も、もう、いいよ……。自分でするから……」

「お前、自分で身体洗うの慣れてないだろ？」

「だ、大丈夫だもん。もう慣れたし……」

「それに中にオレのが残ってたら大変だし」

指先をずいっと肉壺に入れると、ララはへにやつと泣きそうな顔をした。中のまだ熱いとろみのついた液体を丹念に掻き出す。ある程度泡で洗ったあと、お湯をかけた。何度も指を出し入れして汚れがないように丁寧に指先でさぐった。上側のヒダのこりこりしたところを弄ると、ララの身体がびくんと震えた。

「ここ、気持ちいいか？」

「ん……んんっ……！」

ララは目を閉じて、身をよじった。バスタブから足がおつこちそうになる。

「洗えなくなっちゃうから、足抱えてて」

はいと両足を胸の方に押しつけると、白いおっぱいがむにゅつと潰れた。ララは欲情に潤んだ瞳でじつとオレをみた。珊瑚色のくちびるがツヤツヤしてる。

「ずるい！」

「な、何が!？」

「リ、リトだつて汚れてるもん！　わたしのなかに入れたんだし、出したし」

「そりゃそうだけど……」

「だから、わたしも洗うね！」

えい！　と逆に押しなおされる。狭いバスタブの中で、ララはうんしょと向きを変えて、オレの股間に顔を埋めた。当然ララの股間はオレの目の

前だ。これって69っていうやつか？ なにもこんな狭い場所ですらなくて、すぐそこにマットがあんのに。

「ん……」

そんな考えはララの口腔にペニスが包まれた時点で消えた。そもそも、まだそこ洗ってないのいいのかよ、口に啞えて。ララの舌先は丹念にオレの感じるところを追いつめていく。先端にちゅっちゅっときスをしたあと、エラの部分を丁寧に舌先でなぞる。

「くっ……！」

思わず声が漏れる。ララに舐められるのってすごく気持ちいい。テクニクがどうか、体験の少ないオレには比べようもないけど、真剣に、大切にオレのこと愛してくれる気持ちがあったわって来るからだ。気持ちいいだけじゃなくて、じんわり心の奥が熱くなる。オレもララのこと気持ちよくしてるのかな。しないと。

目の前にあるララの秘所は、洗ったばかりで清潔な匂いがするのに、まだ淫狼に赤く色づいていて、見るだけで興奮した。ぼたりと、オレの顔の上に雫がしたたる。ララの蜜だった。花卉が目の前で切なげに震えている。オレはララの花芯に口づけをした。赤い充血しきったちいさな突起をゆっくりと舐める。ちゅっとな音をたてて肉芽吸う。

「あうう……！」

オレの欲望をしゃぶっているララがくぐもった声をあげた。ふたりで、性器を舐め合う。快感が波みたいにおしよせてきて、だんだんと息が荒くなってくる。

「もう……でる……」

オレが言うと、ララは肯いた。

「うん、だして。わたしの口にも、リトの……いっぱい……」

ララがオレのペニスを賢明に吸い上げてくれる。オレもララの蜜を吸いながら、指先を秘壺にめぐりこませた。さつきえぐった感じやすい場所を

もう一度刺激する。狭いバスタブで、身動きしづらいヘンな格好で、バカみたいなんだけど、気持ちよくて、うれしかった。オレはララのごく好きだと思った。

ぎゅっと吸われると、快感の炎がペニスの先から、腰から、脊髄を通過して、脳を燃やした。指の先まで白く燃えるようだった。オレは身体を震わせながら、ララの口腔に精液を放出した。

★

クリスマスソングが聞こえてくる。今かかっているのは「恋人がサンタクロース」だった。こてこてだなあ。定番が一番だけどさ。

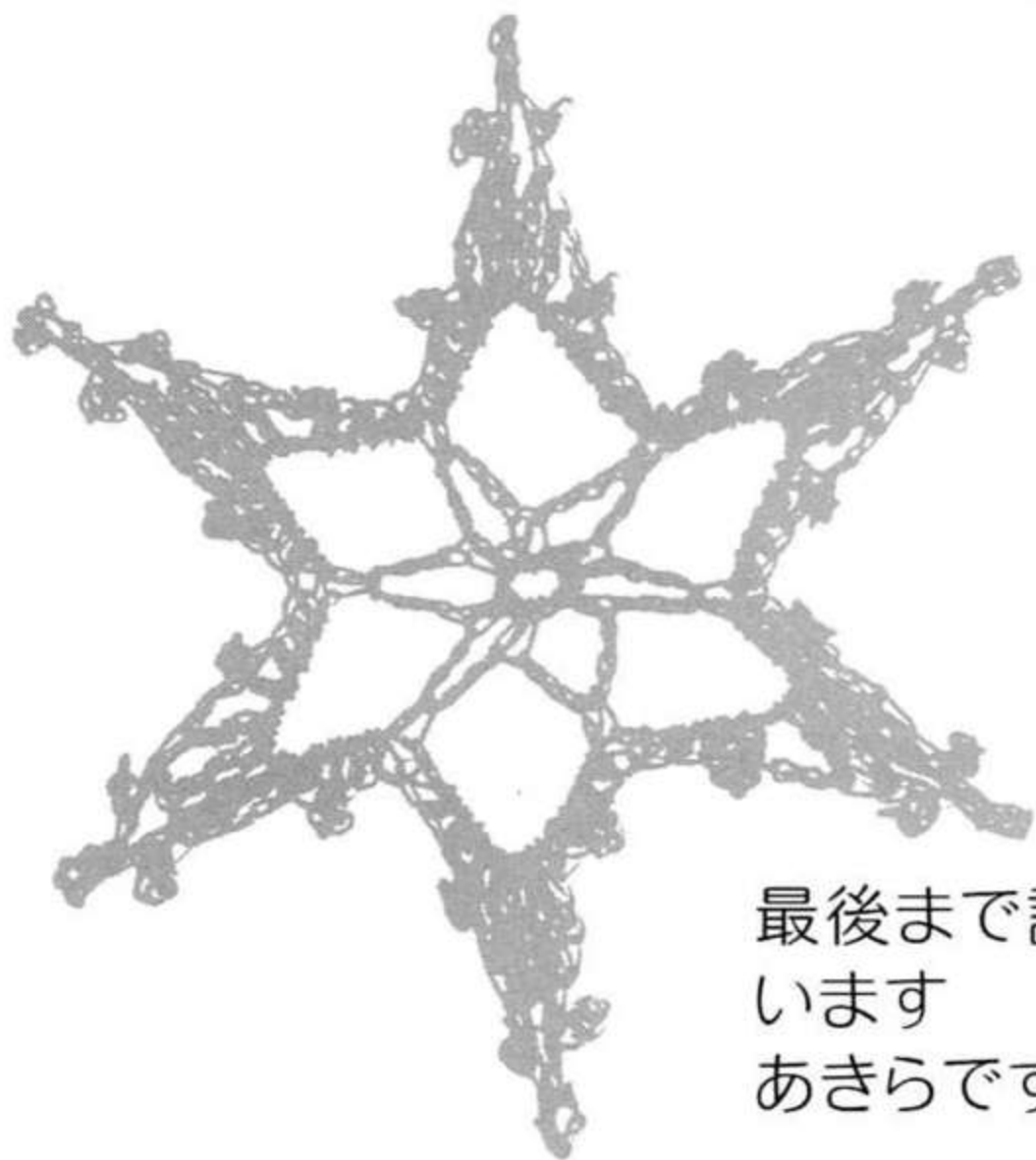
気持ちよさと疲れでべったりとバスタブに転がっていると、ララがもぞもぞと向きを変えて、オレの隣のすきまに寝ころんだ。

「狭いだろ、外にできればいいのに」

「いーの」ララはぴったりとオレにくっついて、ぎゅっと首筋にしがみついた。「このほうがそばにいられるもん」

また汗をかいて、べたべたで、バスタブだから寝心地なんてよくないし、熱気が籠もって熱いのに、オレはなんだかうれしかった。ララもそうだといいなと思いつつ、顔を引き寄せて、ゆっくりときスをした。





最後まで読んでくださってありがとうございます
います
あきらです^^

なんかちゅんくさんの小説見てみたら
すごく内容がかぶってて笑いました…
それにしてもララ大好きです^^*
本当は古手川さん本を作ろうかと思って
たのに
ジャンプ2号のララが可愛すぎてダメだっ
た…
ララ…可愛いよララ…!

◆1/25に Lime 様から「ノストラダムスに
聞いてみろ♪」が発売されます!
原画描かせていただいているので、よかった
ら遊んでやってください~^^
わたしも早くプレイしてみたい…!!!

ではでは~
ありがとうございました!

POSTSCRIPT

この本は成人向けです。

18歳未満の方の閲覧を禁止します。

無断転載・複写・複製・Webへの掲載を禁止します。

奥付

サークル名：うさうさ

連絡先：<http://usausa.main.jp/>

発行日：2007/12/31

印刷：サンライズさま

RITO ♡ LALABOOK



2007.12.31 PRESENTED BY USAUSA